



## 置戸の農産物 ～水稲

昭和7年には耕作面積420ha



佐坂農場では水田耕作が盛んで水門もあった

明治末期、想像を絶する処女地開拓の中、入植者が、まず自給自足のために作ったのはイナキビ、麦、馬鈴薯でした。大正4年に野付牛村から置戸村が分村しましたが、大正5年の記録では、作付面積が多い順（現訓子府を含む）に、裸麦、えん麦、イナキビ、えん豆、馬鈴薯、菜豆などが生産されていました。

置戸の水稲試験は、大正7年に当時の佐坂農場（現在の安住）で笹尾政助などによって始められました。翌年には、秋田の佐々木三四郎、大和谷末吉、由利末治が試作し、反収3俵前後を収穫。一方、佐坂農場では大正11年の大豊作で相当の好成績を挙げたことから、同13年から本格的造田に入り、昭和4年までに150haの造田を完成しました。時代背景としては、大正7年の第1次世界大戦の終結により畑作農産物が極端な不況に陥り、国が国内自給政策により多額の国費を投入し、北海道の造田を推進した事情がありました。

このような中で、品種改良が進み、寒冷地向けの「直坊主」が普及したこともあり、反収が大幅

にアップ。全村的に水田耕作農家が広まり、昭和7年には置戸全村で420haの水田面積に達しました。その後、太平洋戦争による人手不足や、打ち続く凶作により畑作転換者が続出し、昭和30年代には93haにまで減少しました。

その後、国民の食生活の変化や米の品種改良などによる収穫増に伴い余剰米が増加したことから、国は昭和45年から米の生産調整を行いました。置戸の水稲はその時点で20戸20haでしたが、国の政策に基づいて転作、休耕する農家が相次ぎ、同55年には6ha、同60年には3haに減少。

「置戸産の米で日本酒を」と清酒『置っ戸っ戸』の原料となる米を生産していた北光の農家も、平成11年を最後に稲作を止め、本町における稲作が皆無となりました。

農産物が、気候の変化や世界情勢、国策などによって大きな影響を受けることは、今も昔も変わらないことが、水稲の変遷を見ても明らかです。

（参照：置戸町史、置戸町史上巻、続置戸町史、町事務報告）



## 皆さんに親しまれる施設づくりを

置戸町社会福祉協議会

養護老人ホーム常楽園・特別養護老人ホーム緑清園 施設長 沼田 巖さん

4月から新たなスタートを切った両老人ホームの施設長として仕事に励む沼田さん。帯広市の出身で、今年の3月までは道職員として後志管内余市社会福祉事務出張所に勤務していましたが、定年退職を迎え、長きにわたり社会福祉事務に従事した経験を生かすため、単身で置戸町へ赴任して



きました。「不安や緊張もありますが、入園者が安心して生活ができ、ご家族や町民に親しまれる施設づくりのために一生懸命頑張ります。これまでの町営老人ホームならではの様々な良い部分は踏襲しつつ、経営感覚を持ちながら効率化を図り、皆さんの期待に応えられるよう努力します」と抱負を語ります。また、プライベートでは「町民の一人として地域行事などには積極的に参加したいです。パークゴルフや魚釣りにも挑戦したいですね」と、新天地の置戸町で、公私ともにやる気に満ち溢れる沼田さんです。